農林水産大臣賞受賞

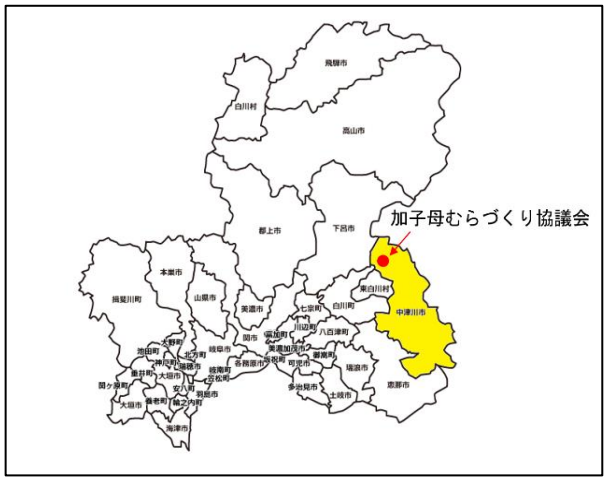
若者が回帰するむらづくり

受賞者　加子母（かしも）むらづくり協議会（きょうぎかい）

（岐阜県中津川（なかつがわし）市）

■　地域の沿革と概要

第１図　位置図



加子母地域は、岐阜県の東部にある中津川市の最北部に位置し、総面積の89％を山林が占める「山間農業地域」である。地域を貫流する白川（通称：加子母川）に並行して国道が縦貫し、それに沿って帯状に 10 の集落を形成している。

地域の人口は 2,815 人で、総人口に占める 65 歳以上の割合が 37％と、高齢化が進んでいる。

地域内の農地面積は 276ha で、うち田が 220ha、畑が 34ha、樹園地が 20ha、牧草地が 2ha となっており、田については 91％で農地整備が完了している。

■　むらづくりの概要

１．地区の特色

加子母地域の主要産業は、農業、畜産業及び林業で、山間地域の寒暖差を活かした夏秋トマトや、清らかな水、澄み切った空気の恵みを受けた飛騨牛の生産が盛んである。

また林業については、豊富な山林資源に恵まれ、古くから良質な「東濃桧」の産地として知られており、「東濃桧」を使った産直住宅建設に関わる者も多い。

第１表　地区の概要

事　項	内　容	
地区の規模	旧市町村単位の集団等	
地区の性格	地縁的な集団等	
農 家 率 （内訳）		42.7%
	総世帯数	953戸
	総農家数	407戸
専兼別農家数 （内訳）	専業農家	53戸
	1種兼業農家	20戸
	2種兼業農家	140戸
農用地の状況 （内訳）	総土地面積	11,416ha
	耕地面積	276ha
	田	220ha
	畑	56ha
	耕地率	2.4%
	農家一戸当たり耕地面積	0.7ha

２．むらづくりの基本的特徴

（１）むらづくりの動機、背景

写真１　加子母地域全景

加子母地域の主要産業は、生産者の高齢化が進み、後継者不足から生産者個人で研修生を受け入れるも、負担が大きくなっていた。

特に林業においては、木材単価の低迷と人件費の高騰、木材による従来工法からコンクリート・鉄構造建築へのシフトにより、木材需要が大きく減退していた。

このような課題を抱える中、平成 17 年に加子母地域（当時の加子母村）は市町村合併により中津川市となり、市の最北端の地域となったため、地域の活動や広報機能等の縮小により、住民たちのコミュニティの低下が懸念されていた。

そこで自主的な地域の運営に取り組むため、市がまちづくり推進のために立ち上げた地域審議会を発展させ、平成 24 年に「加子母むらづくり協議会」が組織化された。

（２）むらづくりの推進体制

ア　当該集団等の組織体制、会員の状況

加子母むらづくり協議会の会員は、加子母地域に在住するすべての人をもって組織され、委員会、分科会、部会をもって構成されている。

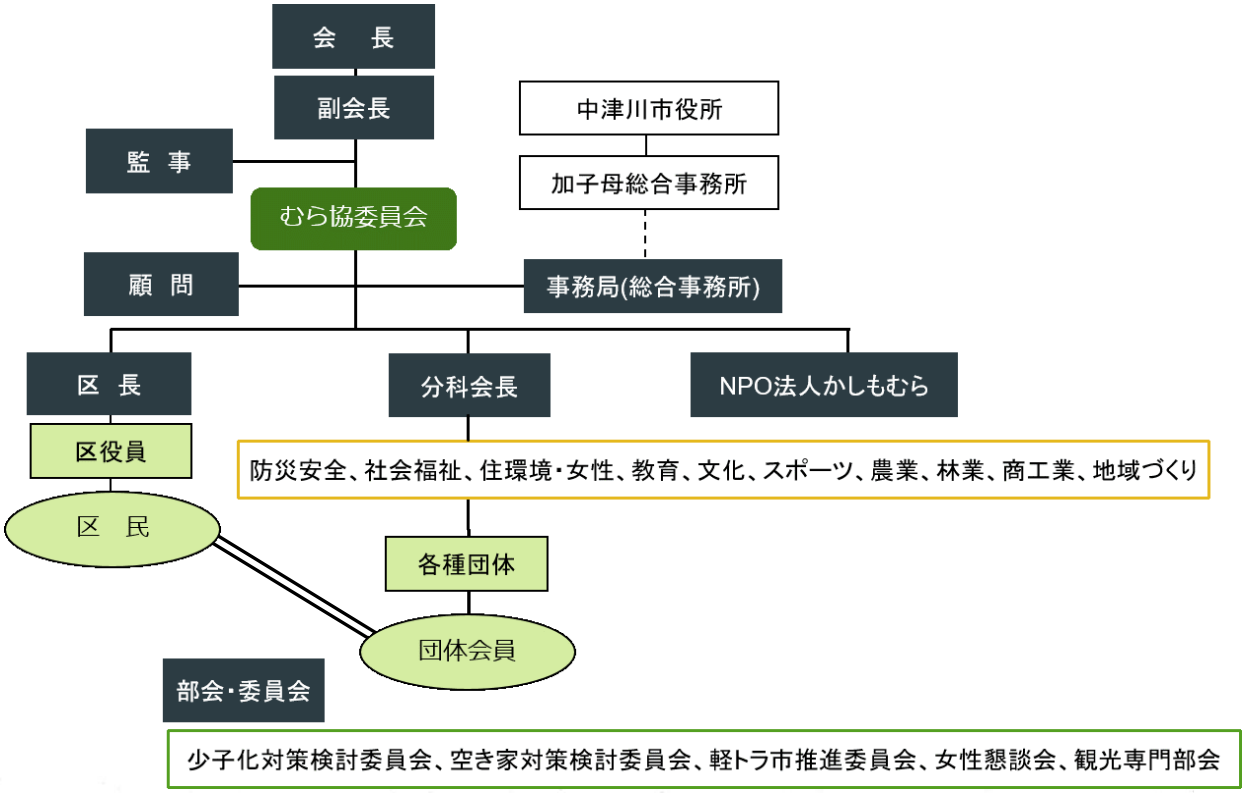
委員会は、加子母地域にある 10 地区の区長と、協議会内に設置されている 10 の分科会の座長からなる最高決定機関となっており、次に 10 の分科会があり、部会はその分科会に属して設置されている。

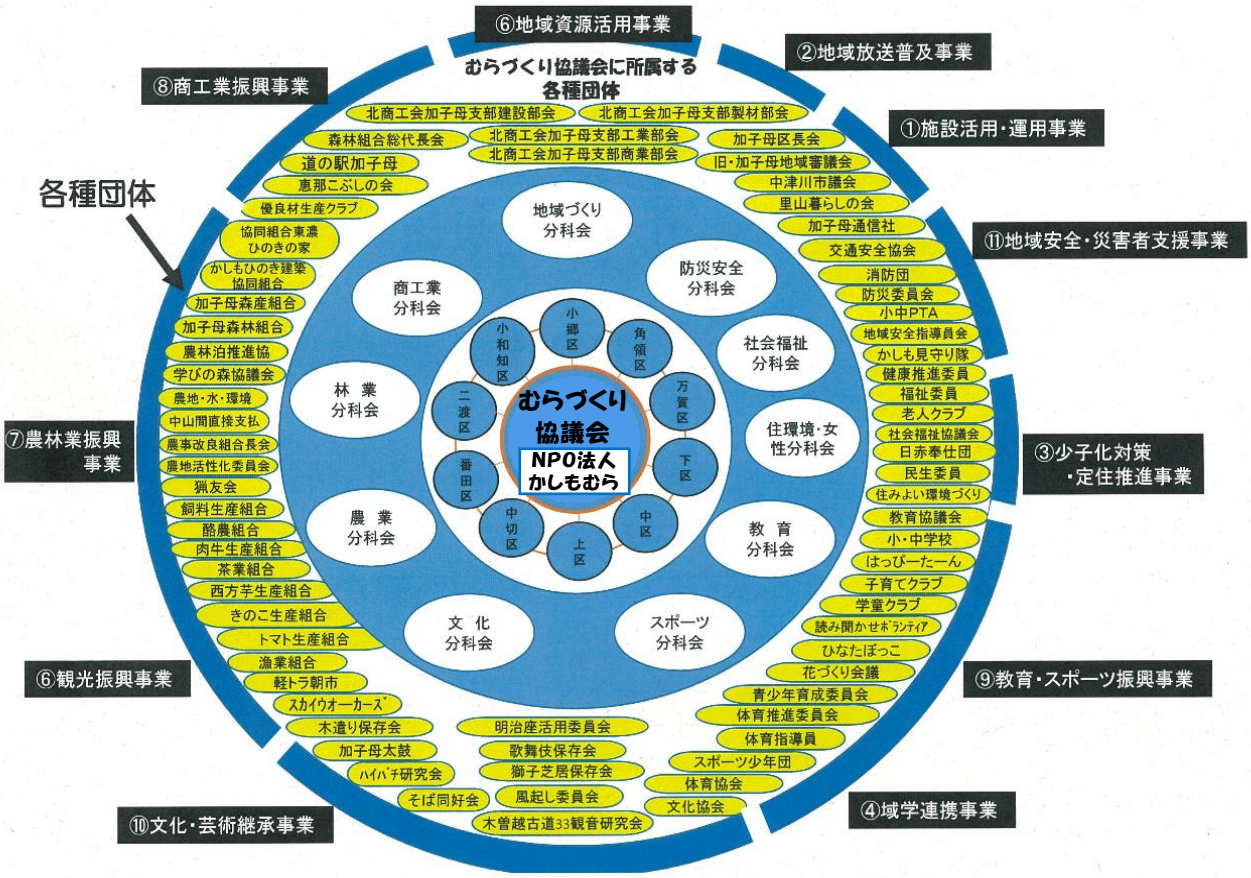
毎月開催される委員会で、地域全体の課題・問題についての協議や、部会、分科会からの報告及び問題点等の提案を審議している。

イ　当該集団等と連携してむらづくりを行う行政機関との関係

加子母むらづくり協議会は、平成 27 年、協議会内に経済活動の発展を目的とした「ＮＰＯ法人かしもむら」を設立、地域のコミュニティバスの運行や、地域放送普及事業、地域の文化遺産である芝居小屋「かしも明治座」の指定管理など各種事業主体として、中津川市と連携しながら運営している。

第２図　むらづくり推進体制図





ウ　むらづくりに関して地域の住民の当該集団等との関係及び参加状況等

①　かしも健康とまと村（農業分科会）

トマト生産組合が運営する研修農場であるが、他分科会で実施している大学との交流事業で訪れる学生や、観光客向けにトマト狩り体験を行い、分科会同士の事業交流により加子母の魅力を発信している。

②　軽トラック市（地域づくり分科会）

地元農産物の販売及び住民と観光客との交流を図る目的で、６～12月の第３日曜日に開催しており、トラックの荷台には農産物の他に、加子母への移住者や地域の女性たちの手作り商品なども並び、観光客の目を楽しませている。

③　域学連携（教育分科会等）

加子母地域では、全国から様々な学問を学ぶ大学生が集まり、その全ての学生が、協議会の分科会や、地域の子供たち、住民と交流し、一緒に活動、学習している。

この活動は、加子母地域の自然環境や歴史、伝統文化を学び、子供たちと一緒に、将来の加子母地域を考える授業などの取組みに広がっている。

写真２　加子母教育の日

また、毎年教育、農業、林業、地域づくり分科会に所属する地域住民が先生となり、子供たちに地域の歴史や伝統芸能、農林業などを教える「加子母教育の日」を設けている。これは、加子母地域は高校までが遠く、中学卒業と同時に加子母を離れる生徒も多いため、中学卒業までに、地域への愛着を育む教育として取り組まれている。

■　むらづくりの特色と優秀性

１．むらづくりの性格

過去 40 年の間に、Ｉターンで約 300 人の移住実績を持つ加子母地域は、従前から、あらゆる人を受け入れて融合してきた気質「加子母スピリッツ」が根底にあり、また「自分たちで何でもやる」という自主的な活動を行う素地ができており、「オールかしも」の精神で地域の自立をテーマに、地域住民全員がむらづくりに参画している。また、地域の課題に対し、住民全員が積極的に関わり、地域の特性を活かした「人づくり」、「地域づくり」に寄与し、30 年後、50 年後を見据えた取組みを行っている。

２．農業生産面における特徴

（１）当該集団等の農業の取組

ア　「かしも健康とまと村」の取組（農業分科会）

平成 19 年にトマト生産組合が設立した「かしも健康とまと村」は、研修用の農場を整備し、生産者が協力して就農希望者の受け入れを行っている。また研修後、加子母で就農する際には、農地の確保や住居探しが必要となるため、協議会と連携し、加子母地域の空き家を紹介するなどの就農支援も行っている。

平成 29 年には地域内に「ＪＡひがしみの夏秋トマト研修農場」ができ、生産者とＪＡ、県及び市が一体となったトマト研修生の受け入れも始まっている。

この取組みの結果、この 10 年間で県内外から６人（平均年齢 41 歳）の新規就農者が加子母地域で就農し、新たにトマト生産組合の一員となって、地域の主要な担い手となり、地域を牽引する存在となっている。

イ　「トマト大作戦」の取組（農業、教育分科会）

小学校の地域の生業を学ぶ授業では、トマト生産組合青年部を中心とした地域の若手農家が指導者となり、「トマト大作戦」と銘打って、６月の定植から 11 月のほ場片付けまで、トマト生産の全てを体験学習として実施しているほか、小学生が自分達で育てたトマトを、道の駅で販売する販売体験も行っている。

この販売の収益は、子供たちの地域へ還元したいとの願いから、社会福祉協議会への寄付やお世話になった方々へ手作りピザ等を振る舞う行事の費用などに活用されている。

食育も兼ねているこの取組みは、小学生たちが地域の特産であるトマトを育てることで、地域への愛着、農作業の楽しさ、食べ物の大切さを学んでいる。

写真３　「トマト大作戦」販売体験

（２）当該集団等の林業の取組

ア　「かしも木匠塾」の取組（林業分科会）

林業分科会が実施する「かしも木匠塾」の取組みは、平成６年から行われており、現在では、学生が分科会の指導のもと運営主体となって、８大学約 300 人の学生が参加している。

木匠塾開催の 10 日間、地域の大工らの指導を受けながら、木製構造物を製作する実習作業を行うとともに、毎年地域の要望を聞き、大学ごとに製作物を決めており、バス停や集会所、再生された古民家など、地域には歴代の木匠塾生が製作した作品が点在している。

木匠塾が開催される夏の時期は、地域人口の１割以上が大学生となる、言わば大学村に変貌する。木匠塾は、地域と地域住民が一年で一番若々しく活気づき、高い経済効果が期待できる事業となっている。

過去には、林業を担う若者の減少が心配されたが、ここ 10 年で山間地に対する意識変化が見られ、ふるさと回帰意識や、自然環境への関心等が高まったこともあり、この５年間に県内外から一般公募を含め５人（平均年齢 21 歳）の若者が、加子母森林組合へ就業した。

写真４　かしも木匠塾の閉校式

さらに、地域内の林業事業体や林家にも若い世代がＵターンするなど、木匠塾を通して、将来に向けた、木を使ってもらう教育と環境づくりが定着しつつある。

イ　美しい森林づくりの取組（林業分科会）

林業分科会の中心となる加子母森林組合では、木材単価の低迷が続く中、※1「美林萬世之不滅」（びりんばんせいこれをたやさず）の山づくりの理念を打ち出し、様々な状況下においても対応できる森林づくりを目指して事業を行っている。

そのほかに、環境省のＪ－ＶＥＲ制度の導入、木工品開発、ヒノキ葉等を利用した精油、ハンドクリームなど、新たな分野の商品開発にも取り組んでいる。

※１「美林萬世之不滅」（びりんばんせい これを たやさず）

林齢の異なった色々な木が配置され、草花や木の実があふれ、小鳥や動物、昆虫が棲み、豊かな水を育む『美しい循環型の森林』を育て、護っていく意思を表した山づくりの理念。

３．生活・環境整備面における特徴

（１）生活条件の改善・整備、コミュニティ活動の強化、都市住民との交流等への寄与状況

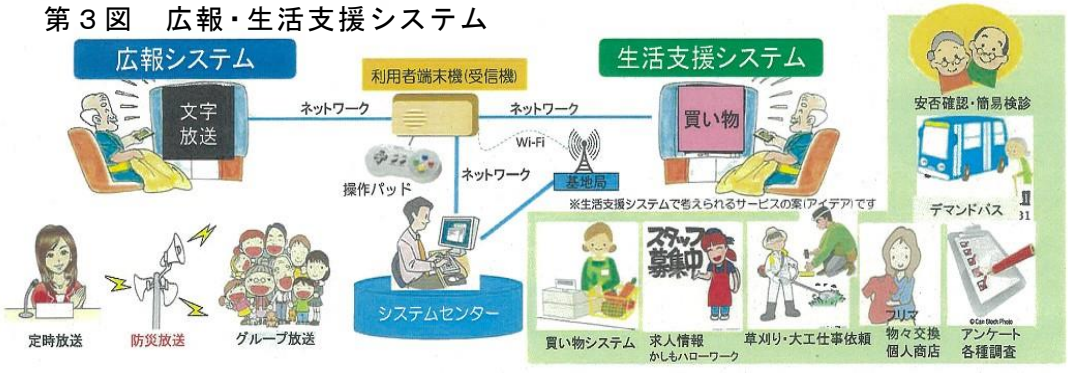
ア　広報・生活支援システムの開発（地域づくり分科会）

加子母地域は合併により村内放送がなくなり、地域の情報共有や高齢者などの買い物弱者の生活支援など、地域の利便性向上が必要となっていた。そこで協議会は、各分科会の意見をまとめあげ、加子母にＵターンしてＩＴ会社を起業した者を中心に、住民に必要な内容を盛り込んだ新たな独自のシステムをつくり、行政と連携しながら、ＮＰＯ法人かしもむらが事業主体となり、平成 29 年から運用を開始した。

本システムは、「地域広報システム」と「生活支援システム」の２つの機能からなり、「地域広報システム」は、行政情報はもとより、地域の行事や会議、店舗や医院の営業時間変更及びお祭り行事のお知らせ、求人情報に至るまで、様々な情報を提供している。一方、「生活支援システム」は、買い物が不便な高齢者などに対し、地域の店が参加し宅配を行うなどの買物支援の役割を果たしている。

今後、自宅の草刈や大工仕事などの役務依頼や、高齢独居者などの見守り（安否確認）システム、アンケートシステムなどのサービスの提供を展開する予定であり、これらの生活支援によって地域内経済の循環が生まれ、地域の活性化が促進されることが期待されている。

第３図　広報・生活支援システム



イ　コミュニティバスの運行（地域づくり分科会）

本地域は公共交通空白地域であるため、１日数本の路線バスが唯一の交通手段で、移動のほとんどを乗用車に頼っており、免許を所有しない人や高齢者などの交通手段の確保が重要な課題となっていた。

写真５　コミュニティバス

そこで、地域づくり分科会が中心となり、運行コースや停留所について協議会で検討を行い、ＮＰＯ法人かしもむらが、市からコミュニティバス運行の業務委託を受けた。

このように利用者自らがバスの運営に参加した結果、市内の他地域と比べてもダントツの利用者数を誇るに至った。

利用者の多くは高齢者であり、買い物や通院、役所やＪＡ、郵便局への用事など毎日の生活の足として広く利用され、地域住民にとって欠かせないものとなっている。

ウ　観光振興（観光専門部会）

協議会では、都市住民と加子母地域の人々の交流や、地域の文化資産、食文化などを紹介するグリーン・ツーリズム「加子母るツアー」を開催し、過去３年で 28 人が参加している。

それ以外にも、伊勢神宮の式年遷宮用材が切り出される国有林の木曽ヒノキ備林、創建 125 年を越える芝居小屋「かしも明治座」、樹齢数百年の大杉と地蔵尊、裏木曽一帯の幕府直轄林を管理した山守・内木家の「山守資料館」など、加子母の歴史、文化資産を見て、加子母の郷土料理を食べて交流する観光ツアーを開催している。特に明治座には毎年 15,000 人以上の人が訪れている。

写真６　かしも明治座

（２）地域への定住促進、女性の社会参画の促進状況等

ア　空き家対策による定住促進（空き家対策検討委員会）

協議会では、定住促進のため、子供を育てる環境の整備、ＵＩターン者の住居、就業、通勤・通学及び交通手段などの課題解決に向けて、平成 28 年に「空き家対策検討委員会」を設立し検討している。

この検討委員会では、区長会を通じてアンケート調査を実施し、これに基づき地元の建築業者と現地視察を行い、早期入居の可否、建物の安全性などを検討しながら、移住可能な物件データを作成している。

この取組みにより、農業や建築業を希望する家族の移住につながり、検討委員会の設立後、３世帯６人のＩターンと、２世帯６人のＵターンが移住した。

また、若い移住者との懇談会を開催し、移住の問題点や課題、加子母への移住で良かった点などの意見集約や情報収集に努め、移住定住の推進に役立てている。

イ　女性の参画（住環境・女性分科会）

少子化で、年間の新生児が 11 人（平成 30 年度）となった加子母地域では、乳幼児とその親たちの交流の場が極端に少なくなり、気軽に子育て相談ができないなど、子育てが困難な地域となりつつある。

そのような中、若い母親たちは、安心して、楽しみながら子育てができる加子母を自分たちで作っていく取組み「はっぴーたーん事業」を協議会の中に新しく立ち上げ、情報交換を行っている。

また協議会では、平成 29 年に「女性懇談会」を立ち上げ、講師を招き女性をテーマにした講義や、地域内で活動する女性団体の活動紹介などを行っている。

この取組みにより、各女性団体のつながりや連携が強化され、女性目線で地域づくりを検討し、女性が地域づくりに参画しやすい環境づくりを推進している。